

助産学生の周産期援助に対する産婦の評価 — インフォームドコンセントの効果 —

鳥取大学医学部保健学科母性・小児家族看護学講座

佐々木くみ子, 鈴木康江, 島林睦美, 片山理恵, 西村正子, 前田隆子

Mothers' Evaluation of Students Midwives Care

Kumiko SASAKI, Yasue SUZUKI, Mutsumi SHIMABAYASHI, Rie KATAYAMA,
Masako NISHIMURA and Takako MAEDA

*Department of Women's and Children's Family Nursing, School of Health Science,
Faculty of Medicine, Tottori University.*

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the effect of our improved method for obtaining a mother's consent to receive student midwife care in clinical practical by mothers' evaluation of the care. A survey was conducted of 33 mothers who received care from student midwives during their perinatal periods. As the results, degree of mother's satisfaction was more than 80.0%. As time passed, the mothers came to have more positive feelings and less negative feelings toward the students. The mothers' comments about students midwife care consisted of comments with words like "gratitude", "encouraging", "feeling relieved" "close together", "comfort", and "sympathetic attitude" and others. A detailed explanation of the clinical practical of midwifery and exchange of relevant documents was a good influence for mothers in strengthening their positive feelings and weakening their negative feelings toward student midwives. In conclusion, mothers' general evaluation of students midwife care was high, and our improved method for obtaining mother's consent was effective. (Accepted on February 21, 2005)

Key words : perinatal care, student midwife, clinical practice

はじめに

我々が先に行った研究¹⁾では、助産学生の援助に対する産婦の満足度は高く、妊娠・分娩・産褥期と継続して受け持ち、援助を提供することで、産婦が学生に抱く肯定的感情が高まり、否定的感情が減弱することが明らかとなった。しかし、産

婦の高い評価が得られたにも関わらず、助産学実習への協力を依頼する場面で、「断れなかった」感じを抱いた産婦が存在し、この産婦は「断れなかった」と思わなかった産婦に比較して分娩期・産褥期の学生に抱く否定的感情が高かった。このことから、助産学実習における対象産婦に対するインフォームドコンセントのあり方が検討課題と

表1 助産学実習のインフォームドコンセントに関する改善策

リーフレットの内容

1. 助産学実習に協力した産婦のことば（アンケート調査より抜粋）
 - *分娩期の援助に対する感謝
 - *気さくさ、丁寧さ、真摯さへの評価
2. 助産学生の実習後のことば
 - *協力への感謝
 - *助産師への決意

同意書の説明内容

1. 助産学実習の目的
2. 実習内容（分娩介助を含む分娩期の援助，妊婦健診，産褥保健指導）
3. 同意後の同意撤回の保証

なった。

厚生労働省の看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会は、「臨地実習における患者の同意等」について、患者・家族の同意は、看護師学校養成所および実習施設双方が連名で患者・家族と文書で取り交わすことが望ましく、口頭で同意を得た場合であっても、その旨を記録として残すよう勧告した。この勧告を受け、助産師教育における、分娩介助実習を中心とした妊・産・褥婦および新生児に対する助産学実習について、対象となる産婦・家族と文書を取り交わし同意を得る動きがある²⁾。

一般的に、産婦は、初産婦・経産婦を問わず分娩に対してさまざまな不安を抱いている³⁾。そこへ、無資格の助産学実習生が助産介助を行うことへの同意を得るために、分娩間近な時期に実習に関する十分な説明を行うことは、産婦の不安を助長させる。その結果、助産学実習協力への同意を得られにくくするのではないかという懸念がある²⁾。現状では、分娩入院の時点において口頭で同意を得ることが主流である。分娩入院時は、産婦の分娩に対する不安は現実のものとなり援助者の存在を望む時期である⁴⁾。実習協力への同意を得ることは、産婦のニーズとも合致しているため、それほど困難ではないと考えられている²⁾。しかし、助産師教育では、無資格者である学生が分娩介助を実践し、児の娩出（子どもをとりあげる）を行う。心理的に不安定な分娩期に助産学実習に

関する説明を行い、協力の同意を得ることは果たして最善であろうか。

我々は、対象者の権利を保障し、十分に納得した上で実習協力の同意が得られるインフォームドコンセントに関する改善策を策定した。これを、2004年度に実施された助産学実習に適用し、助産学生の周産期援助に対する産婦の評価にどのように影響したのかについて検討を加えた。

方 法

助産学実習におけるインフォームドコンセントに関する改善策は、①「リーフレット」（表1）を用いて助産学実習を分かりやすく説明し周知すること。②実際に助産学実習で学生が実施する援助内容と対象者が実習協力を断る権利を保障する旨を明記した文書（表1）と同意の署名入り文書を取り交わすこと。またその際に、③口頭での実習説明を十分に行うことの3点であった。実習協力依頼は、妊婦健康診査に来院した場面を利用し、分娩開始していない妊娠期の平常時に、教員または臨床助産師によって行われた。この時点では、助産学実習そのものへの協力依頼を行い、同意の文書を取り交わした。分娩開始による入院時には、実習協力の同意書が提出されている産婦に対し、学生立会いのもとで、再度、実習協力の意思を確認した。

助産学実習終了後1ヵ月時点で、助産学生が2004年度の実習中に分娩介助および妊娠期、産褥

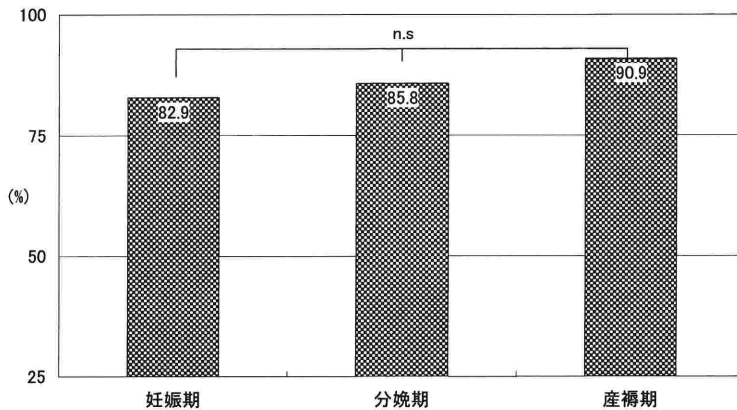


図1 学生の援助に対する産婦の満足度

期の援助を実施した産婦69名に対し、郵送による無記名自記式調査を実施した。調査の実施にあたって、実習施設責任者の同意を得て、対象産婦の個人情報である住所情報を入手し、調査用紙送付後にこの情報を消去・破棄した。また、調査内容に、年齢、産科既往歴等を含めないことで、調査の匿名性を保証し回答内容の真実性を高められると考えた。さらに、調査紙に同封した書面上で、調査の目的、調査への協力が自由意志であること、調査は匿名で行うため協力・非協力のいずれの場合にも不利益を被らないことを説明した。調査協力への同意の意思は、調査紙の返送をもって最終的に確認できたものとした。回収された調査紙は33名(47.8%)であった。

調査内容は、我々の先行研究¹⁾に準じて決定した。「学生の援助に対する産婦の満足度」に関しては、妊娠・分娩・産褥期の援助について、満足度0%から100%の間で主観的評価を求めた。「産婦の学生に抱く感情」に関する<肯定的感情>6項目と<否定的感情>6項目、「学生援助全体を通しての評価」4項目、「受け持ちを依頼されたときの印象」(実習受け持ちの依頼時、断れなかったか)について、「まったく思わない」0点から、「とてもそう思う」5点までの評定尺度を用いて回答を求めた。また、助産実習のインフォームドコンセントに関する改善策3項目の実施状況として、「リーフレットを受け取ったか」、「同意書の説明内容は十分であったか」、「病院での学生実習の説明は十分であったか」に

ついて、「はい」、「いいえ」の2検法で回答を求めた。また、助産学実習に対する感想について自由記述で回答を求めた。

得られた数値データの分析には、統計ソフトSPSS11.5Jを用い、クロンバック α 係数、分散分析およびカイニ乗検定を用いて分析した。自由記述は言語データとして扱い、文節あるいは文ごとに意味内容を検討しながらコード化し、その後、カテゴリーとしてまとめた。

結 果

1. 助産学生の周産期援助に対する産婦の評価

「学生の援助に対する産婦の満足度」は、妊娠期 $82.9 \pm 12.4\%$ 、分娩期 $85.8 \pm 17.8\%$ 、産褥期 $90.9 \pm 15.1\%$ であった。各期において産婦の満足度に有意な差はみられなかった(図1)。

「産婦の学生に抱く感情」について、受持時、分娩期、産褥期での経時的変化を示した(図2)。「産婦の学生に抱く感情」に関する<肯定的感情>の質問6項目のクロンバック α 係数($\alpha =$)は、 $\alpha = 0.894$ 、<否定的感情>の質問6項目については、 $\alpha = 0.857$ であった。<肯定的感情>は、受持時 3.17 ± 9.91 、分娩期 3.88 ± 0.68 、産褥期 4.16 ± 0.69 であり、受持時と分娩期、受持時と産褥期との間に有意な差がみられ、得点が経時的に増加した。また、<否定的感情>は、受持時 2.04 ± 0.81 、分娩期 1.61 ± 0.68 、産褥期 1.31 ± 0.41 となっており、受持時と産褥期の間にも有意な差が認められ、経時的に得点が減少していた。

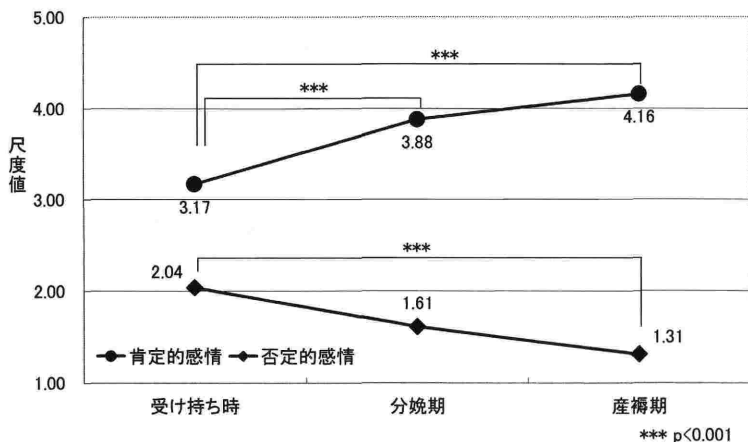


図2 産婦の学生に抱く感情

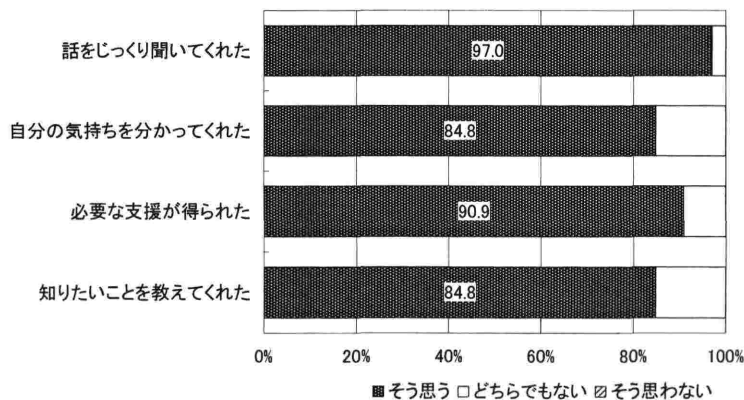


図3 学生援助全体を通しての評価

「学生援助全体を通しての評価」に関して図3に示した。「話をじっくり聞いてくれた」に関して、対象の97.0%が「そう思う」と回答した。次いで、「必要な支援が得られた」については90.9%、「自分の気持ちを分かってくれた」、「知りたいことを教えてくれた」については84.8%が、「そう思う」と回答していた。

「自由記述」からは、総数153の言語データが42のコードにコード化され、8つのカテゴリーにまとめられた(表2)。自由記述の中では、分娩期の援助に関連した記述が中心的で、学生に対する「感謝の気持ち」や「心強さ」、「安心感」、また、「側に寄り添う」ことや、「安楽の援助」、「共感的姿勢」などに関する記述が多くみられた。初め

に抱いた気持ちに関する記述として、学生の知識や援助技術に対する不安に関する4データあったが、これは、受け持ち開始直後に抱いた思いで、その後消失するものであった。

2. インフォームドコンセントに関する改善策の実施

助産実習のインフォームドコンセントに関する改善策の3項目の実施状況に関して、「リーフレットを受け取ったか」については、63.6%の対象が受け取っていたが、33.3%が受け取っていないかった。「同意書の説明内容は十分であったか」、「病院での学生実習の説明は十分であったか」については、87.9%が「はい」と回答していた。

表2 助産学実習に対する産婦の自由記述 (出現数)

<p>学生に対して産婦に生じた気持ちの記述 (39)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 感謝の気持ち (20) <ul style="list-style-type: none"> ・実習生には感謝の気持ちでいっぱいです 2. 心強さ (7) <ul style="list-style-type: none"> ・お産の間すごく心強かった 3. 安心感 (4) <ul style="list-style-type: none"> ・安心して出産できた 4. 気安さ (4) <ul style="list-style-type: none"> ・小さな不安や疑問も気兼ねなく聞くことができた
<p>学生の援助に関する記述 (19)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 側に寄り添う (8) <ul style="list-style-type: none"> ・ずっと眠らずに対応してくれた 2. 安楽の援助 (6) <ul style="list-style-type: none"> ・陣痛の苦しいときに、ずっと腰をさすってくれた
<p>学生の態度・姿勢に関する肯定的な記述 (16)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 共感的姿勢 (4) <ul style="list-style-type: none"> ・出産後、一緒に涙を流してくれた 2. 親切的な態度 (2)
<p>助産学実習の受持ち体験に関する総括的な記述 (10)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習の感想 (8) <ul style="list-style-type: none"> ・心からよかったと思う
<p>初めに抱いた気持ちに関する記述 (6)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 初めの不安・否定的な気持ち (4) <ul style="list-style-type: none"> ・初め不安があった
<p>実習への期待に関する記述 (2)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学生実習の利点 <ul style="list-style-type: none"> ・お世話してくれる人が増える
<p>実習にかかる負担に関する記述 (2)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 診断技術の習得実習 <ul style="list-style-type: none"> ・学生と助産師の二人続けての内診
<p>実習の説明と同意に関する記述 (1)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 同意文書の取り交わし

9.1% (3名) の対象は、「同意書の文書を受け取っていない」と自記していた。3項目すべてに「はい」と回答したものは54.5% (18名) で、すべてに「いいえ」と回答したものはいなかった。

結果を示さなかったが、「受け持ちを依頼されたときの印象」に関する質問項目、「受け持ち依

頼を断れなかったと思うか」について、71.9% (23名) は「まったく思わない」、「あまり思わない」と回答し、28.1% (9名) は「とてもそう思う」、「まあそう思う」と回答していた。しかし、「とてもそう思う」、「まあそう思う」と回答した28.1% (9名) の対象者すべてが、「リーフレッ

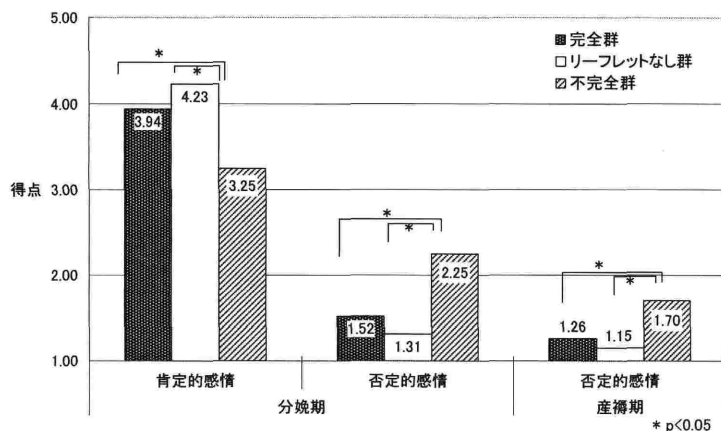


図4 インフォームドコンセントに関する改善策の効果

完全群：「リーフレットを受け取ったか」、「同意書の説明内容は十分であったか」、「病院での学生実習の説明は十分であったか」すべてに「はい」と答えた産婦。リーフレットなし群：「リーフレットを受け取ったか」に「いいえ」、「同意書の説明内容は十分であったか」、「病院での学生実習の説明は十分であったか」に「はい」と答えた産婦。不完全群：完全群、リーフレットなし群を除くすべての産婦。完全群とリーフレットなし群の間には有意な差はみられなかった。

トを受け取ったか」、「同意書の説明内容は十分であったか」、「病院での学生実習の説明は十分であったか」3項目すべてに「はい」と回答していた。

インフォームドコンセントに関する改善策の影響について示した(図4)。「リーフレット」の配布率が低かったため、改善策3項目を完全に実施した「完全群」、「リーフレット」のみを実施していない「リーフレットなし群」、それ以外の「不完全群」の3群を対象を分類した。その結果、「学生に抱く感情」に有意な差がみられ、「不完全群」は、「完全群」、「リーフレットなし群」に比較し、分娩期の<肯定的感情>が低く、<否定的感情>が高かった。また、産褥期においても、「不完全群」の<否定的感情>が、「完全群」、「リーフレットなし群」に比較して有意に高かった。

考 察

本研究では、初産婦と経産婦を分けず結果を示した。これは、初産婦・経産婦を問わず分娩に対してさまざまな不安を抱いている³⁾ことと、自由記述において、初産婦からも経産婦からも同じ内

容の記述が多く得られ、出産経験の有無による特徴といったものは見出せなかったからである。したがって、産婦が学生の援助から得たものは、出産経験の有無によらず同様のものであったと推察されたからである。

学生の援助に対する満足度に関して、妊娠期、分娩期、産褥期と80%以上の満足度の得点が得られた。岩崎⁴⁾は、助産師によって援助された分娩において、産婦の84.6%が自己の分娩体験を「満足な分娩」と評価していたと報告し、中野ら⁵⁾は、約80%以上のものが満足していたと述べている。本研究とは、質問方法が異なるため単純に比較できないが、今回の学生援助に対する産婦の満足度は決して低いものではないといえよう。

さらに、岩崎⁴⁾は、「満足な分娩」の構成要素の重要な要素は、「助産師のかかわり」であり、産婦が求めている援助は、「そばにいて欲しい」、「一人にしないで欲しい」、「声をかけて欲しい」というものであったと述べている。本研究の産婦の自由記述に明らかのように、学生の分娩期の援助は、共感的姿勢で側に寄り添い、陣痛緩和のマッサージを続け、産婦に安心感と心強さを抱かせるものであった。つまり、産婦が求める分娩期の

援助に沿うものであったといえよう。

Kulausら⁶⁾は、共感的な同伴者（ドゥーラ）の存在が分娩の順調な進行に効果的であると報告し、分娩経過中に共感的態度で産婦の側に同伴するものの存在の重要性を指摘している。知識や介助技術の未熟さは否めないが、産婦の自由記述は、学生がドゥーラとしての役割を果たしうる可能性を示すものである。

それにしても、学生の知識や援助技術の対する不安の記述が少なく、学生実習に対する評価がこれほど高いことは驚くべきことである。村上⁷⁾は、自己の出産に十分満足していると評価した女性が、出産の際に「孤立感」や「忙しさがかもし出す拒絶間」を抱いていたことを明らかにし、これらの満たされなかった思いは、満たされた思いによって、相殺されたり合理化されたりする可能性を示した。今回の助産学実習に対する産婦の自由記述から抽出された「側に寄り添う」ことや「安楽の援助」、「安心感」、「心強さ」、「気安さ」は、臨床助産師と違って、同時に複数の援助対象者を受持つことのない学生が、常に産婦の傍らにいて援助を提供する実習スタイルによって、「孤立感」や「忙しさがかもし出す拒絶感」を抱かせていない。学生の診断や技術に関する不安も、相殺し合理化され、総体的に産婦は学生の援助に満足していると推察できる。しかし、相殺されたものが本当に学生の知識や援助技術に対する不安であるのか、別のものなのか、あるいは無いのか、さらに分析の余地がある。

また、産婦が学生に対して抱く感情は、受け持ち時、分娩期、産褥期という時間経過とともに肯定的感情が増強し、否定的感情が減弱する。これは、分娩期のかかわりや、産褥期の援助を提供する過程で、産婦と学生との関係が、「共感的姿勢」や「親切的態度」、「気安さ」、話をじっくり聞く学生の姿勢などによって、より親密なものに移行した結果であろう。

つまり、分娩期は常に産婦の傍らに存在し援助を提供する助産学実習のあり方や、学生の共感的姿勢や親切さ、気安さといったものが、産婦の満足度や学生に抱く感情に効果的に作用していることが示唆される。

一方、インフォームドコンセントに関する改善策の効果に関しては、「リーフレット」の配布にかかわらず、同意に関する文書を取り交わすこと

と、病院での学生実習の説明内容の十分さが産婦の学生に抱く感情に影響している。特に、分娩期の感情に影響しており、親役割の獲得遂行に影響するといわれる産婦の出産体験⁸⁾に、何らかの影響を及ぼしている可能性が危惧される。実習協力の同意に関する文書の取り交わしは、対象者の権利を保障するという倫理的側面において重要な行為である。学生実習によって、対象者のQOLが損なわれてはならない。そのためにも、病院での学生実習の十分な説明のもと、実習協力の同意に関する文書を取り交わすことは不可欠であると考ええる。

本研究は助産学実習の性質上、対象者数が少ないため、今後も対象者を増やし、インフォームドコンセントに関する改善と産婦の助産学実習に対する評価との関連をさらに検討する必要がある。また、助産学実習に対する肯定的評価が目立つことにも留意し、よりよい助産学実習のためには、助産学実習に対する批判や学生の知識・援助技術に対する不安などを掘り下げて分析する必要がある。成人および老年看護学実習において、学生実習の受け持ち患者となった対象は、学生の人間の成長への期待や社会人を育てていくという気持ちで、意図的に教育的活動を行っていたとの報告がある⁹⁾。助産学実習の分析も、学生の援助に関する実習評価にとどまらず、対象となる産婦が実習をどのように受け入れ、学生とどのようにかわり、助産学実習から何を得たのかということにも焦点を当て分析することが、実習をよりよいものとするためには必要であろう。そのためにも、今後は、インタビューなど質的研究法を用いて分析することも効果的であると考える。

結 語

本研究では、2004年度に実施された助産学実習における、助産学生の周産期援助に対する産婦の評価を明らかにし、インフォームドコンセントに関する改善策が、産婦の評価にどのように影響したのか検討した。

産婦の評価は、学生の援助に対する満足度、学生実習の全体的評価ともに高い評価が得られ、産婦が学生に抱く感情も時間経過とともに肯定的感情が高まり、否定的感情が減弱していた。また、インフォームドコンセントに関する改善策の効果は、助産学実習に関する病院での十分な説明と、

実習協力の同意に関する文書の取り交わしが産婦の、特に分娩期における学生に抱く感情に影響することが明らかとなった。

今後の助産学実習では、常に産婦の傍らに存在し援助するというこれまでのスタイルを続けるとともに、病院での実習に関する十分な説明と実習協力の同意に関する文書の取り交わしを完全に実施することが重要である。

2004年度、助産学実習において実習に協力していただきました産婦の皆様、および、調査を行うにあたって、ご協力いただきました鳥取大学医学部保健学科助産学実習施設関係者の皆様に深謝いたします。

文 献

- 1) 佐々木くみ子, 鈴木康江, 植田彩, 島林睦美, 片山理恵, 西村正子, 前田隆子. (2005) 助産学生の周産期援助に対する産婦の評価. 日本医学看護学教育学会誌 (印刷中).
- 2) 全国国立大学助産師教育専任教官会議. (2003) 平成15年度全国国立大学助産師教育専任教官会議議事録. pp. 8-10.
- 3) 玉田太郎, 小田切房子. (2003) 妊娠期の不安. 松本清一編, 母性看護学各論2, 9版, pp. 85-86. 医学書院, 東京.
- 4) 岩崎貴子. (1999) 満足な分娩への助産婦の役割 褥婦, 助産婦へのインタビューを通して. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録 24, 472-477.
- 5) 中野美佳, 森恵美, 前原澄子. (1999) 出産体験の満足に関連する要因について. 母性衛生 24, 472-477.
- 6) Kulaus, M. H, and Kennell, J. H. (1982) RARENT-INFANT BONDING Second Edition. St. Louis:C.V. Mosby Company. 訳 竹内徹, 柏木哲夫, 横尾京子. (1985) 親と子のきずな. 東京. 医学書院. pp. 80.
- 7) 村上明美. (2001) 自己の出産に十分満足していると評価した女性が出産の際に抱いた思い. 日本赤十字看護大学紀要 15, 23-33.
- 8) 蛭田由美, 増子栄美, 亀井睦子. (2000) 出産体験の受け止め方が産後の母親の不安に及ぼす影響. 母性衛生 41, 95-100.
- 9) 小林悦子. (2004) 臨地実習を受け入れる患者の思い. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 29, 79-86.